

戯曲 一人と千三百人（一幕三場）

平澤計七

此一篇には六分の事実と四分の空想とを混じたり、夫は斯くする事が現在の有様を象徴するに適當なりと信ずればなり

登場人物

野澤惣兵衛（野澤造船所社長。五十六歳）

同 おきよ（惣兵衛の妻。五十歳）

同 芳春（惣兵衛の長男。二十七歳）

同 まり子（惣兵衛の末娘。十二歳）

吉岡典作（治療所長。五十八歳）

同 千枝子（典作の娘。二十一歳）

山本房次郎（職工組長。三十三歳）

市川久太郎（職工。四十一歳）

同 由三（久太郎の悴。十一歳）

肉体を売っている男（職工。四十六歳）

魂を売っている男（職工。二十五歳）

片手の男（元職工）

跛の男(元職工)

大火傷した男(職工)

片眼の男(職工)

野澤家の書生

野澤家の下女

同盟罷工者多数

職工の妻、娘等の家族多数

荒海文雄(何者かわからず三十二三歳)

時代

大正七年初夏

場所

神奈川県某大造船所のある土地

第一場

(野澤造船所の職工千三百余名が、賃銀三割増、購買組合の改善、吉岡治療所長排斥の三ツの要求を貫徹せんが為めに、総同盟罷工を行った。其六日目、晴れた初夏の夕暮前、寺院の本堂に多数の同盟罷工者は集合して、何事をか語り騒いである。背景は仏壇。仏壇の前に同盟罷工者の報告壇が作れてある。金色に輝く法燈や、精巧な欄間の彫刻や、丹塗の円柱や、夫れらを溶合した寺院の空気に、同盟罷工者の不安、昂奮、

緊張した気分が織り混って騒しくも亦静かな舞台を現している。罷工六日に涉って猶会社の態度は強硬なので、彼等の心は恐ろしく危険性を帯びて来た。然し、失望と、生活の窮迫との為め、罷工を裏切ろうとする心が、或る人々の心の底には動いている)

(突如として、何事が起こったらしい氣勢が群集の心を虜えた。彼等は士官に命令された、兵卒が行動する速かさを舞台の下手を等しく見た。がや、く、した声がぴたりと止んで仕舞った。彼等の神経は必要に迫られて訓練されたので、斯かる行為は頗る迅速である)

(下手より、若い身長の高い男が、痩せた老職工を引きずるように連れて来て罵りながら群集を押分けて報告壇の前に出る)

山本 (同盟罷工の実行委員長、洋装のがっしりした体格の男。若い男に向って) 什麼したんです。

若い男 (誰に云うとも無く罵る) 此奴は大だ、俺あ確かにわかった。什麼もおかしいと思つた、会社へ電話で真実にストライキする心は無かつたんでござりますが無理にすゝめられたものでござりまするから、なぞと吐しゃがった奴は此奴に違い無い。(群集騒ぐ)

老職工 (泣くような声で吃りながら) そ、そ、そんな事は、そんな事はありません、そ、そ、そんな事は……。

若い男 何云いやがるんだい。そんなら何故今日は出て来ないんだい。今日あたりはのるかそるかかってんだ。なあ、みんなの顔を見ろ、血眼になって奮闘しているんだ、ぬく、く、自宅に収つて居たは手前ばかりだ。

老職工 そ、そ、それがさ、勘弁しておくんなせよ、俺あ気分が悪るかつたんだからね。

若い男 嘘付け、此騒ぎに病氣になぞなつて堪まるものか、病氣は病氣だが、大病氣だろう、尤も手前なんかはよ、平常から肉体を売っている職工だからだ。

老職工 俺あ全く気分が悪るかつたんだからね。

若い男 やい手前はよ、平常は平常で肉体を売つていやがって、いざつて場合には友達迄売りやがる。

老職工 (反抗気味に) 嘘だつて云うに、証拠はあるかえ。

若い男 証拠？（口づまる）

老職工 証拠も無くて、何だって俺あが大だ。

若い男 （口づまって齒噛みを為し老職工を睨む）ウヌツ。（突然老職工を擲る）

（其付近に居た五六名の人々立上って、僅かの間、若い男と老職工を中心として纏れ合う、其鎮まった時には、山本委員長が老職工を背後に庇って、若い男と対立している）

山本 （静かに）私に任して貰おう、仲間喧嘩をしている時じゃ無からうぜ（老職工に向って）辛い目に逢いましたね、何しろ気が立っているんだから堪えて下さい。何所か怪我をしませんでしたか。

老職工 いゝえ別に怪我はしませんが。

山本 それは何よりでした。（哀む如く老職工を凝視した後）こんな場合だからね、私はみんなの為に、お気の毒な事も聞かねばならないが、全体お前さん、今日の此集合には何故出席なさいませんでした。真実に病氣だったんですか、それとも……

老職工 （やゝ云いたためらったが、投げるような言葉で）俺あ三日飯を喰わねえ。

（群集、電気に感じたるが如く、恐ろしい沈黙を作った）

老職工 （罵る）会社の奴め、米の配給を止めて仕舞いやがった、罪の無い子供迄泣かしやがる。

山本 （老職工の手を犂と握る、そして群集に対して）諸君お聞きの通りだ、購買組合は勿論私共の購買組合なのです。それを会社は私共を苦しめる利器として、米の配給を止めてしまった（泣くが如く）此所に三日間食事をせぬ人があります。諸君の米櫃も恐らくは空であります。う。（断乎とした声で）併し吾人は負けてはならぬ（訴える如く）諸君の心は勿論小動きも致しますまいが、いたいけな妻子の苦しみを見る時、何人か心を動かさざるを得ましょう。（再び断乎とした声で）併し吾人は勝たねばならぬ。此場合吾人が若しも節を屈して此目的を裏切ったならば、吾人は人間としての待遇をされないのみでなく、又実に人間としての心を失った奴隷にならねばならぬ。

(群集、拍手する事も忘れて緊張し、又我れを忘れて拍手した)

(其、静寂な深林が暴風に襲われたが如き、拍手の終つて、元の静寂に帰らざるうちに、群集は又新しい驚愕に面した。若い男が老職工を抱いてぼろ／＼、声をあげて泣いているのである)

若い男 すまなかつたな、全くすまなかつた。飯なんざあ俺の宅うちにいくらもある。と云う程でも無いが少し位はあらあさあ諸共いっしょに行こう。

老職工 (感動しながら) よろしゅうござりますよ、え／＼有難うございます。

若い男 遠慮する事は無いや、さあ。(両人退場、群集無言で見送る)

第一の群集 (呟く如く) 可哀想かあいそうに、あの身体で三日も飯を食わなくては堪たまったものじゃ無い。

第二の群集 全くだ、肉体を売っている職工に違い無いのだからな。

第三の群集 肉体を売っている職工とは全体何の事です。

第二の群集 荒海あらみさんが左様そう云つたんだ。それからあの若い男は魂を売っている職工だ。と斯様こう云つた。

第三の群集 変っているな、それは又什蕨と云うわけなんです

第二の群集 それはね斯様云うわけなんです、職工は労働を売って賃銀を得るのは普通だが、賃銀を得ようが為め、あの年老っている方は肉体を売り、若い方は魂を売っていると荒海さんが云うんだ。

第三の群集 成る程。

第二の群集 何故なぜって云うに、年老っている方はあの弱々しい身体で、長い問や、過激な労働をしなくっては手間がとれねえから、あの男は身体が弱くな

つゝある事を知りながら働かなきやならない。つまり労働と同時に肉体を売っていると云うのだ。若い方だつて其通り、あの男は職工であるが故、世間からいろ／＼癩しかくに触さわる目に逢あはされる。所で彼奴の魂はだん／＼尖とがつて来て獣のようになる。つまり労働と同事に其魂も売っているんだ。と斯様云うわけだ。

第二の群集 成る程な、甘い事うま云いやがった。

第二の群集 それから荒海さんは斯様云った。魂を売ったり肉体を売っている労働者は一人や二人では無い。殆ど労働者の全部が左様だつて、考えて見れば其通りさね。

第二の群集 ふむ、違ちがい。

第四の群集 で、其荒海さんとか云う人は何者だね。

第二の群集 つい此問迄、仕上工場にいた職人でさあ、

第五の群集 お昼の休みなんかによく僕の方の工場へやって来て、人間は何の為に生きているんだなんて笑話をした人でしょう。

第二の群集 左様左様其人です。其人は全く頼もしい人でした、いつも帽子を曲げて冠かぶつて眼の鋭い。

第五の群集 其くせ笑うと素敵な愛嬌あいせうがあつてね、

第四の群集 で、荒海さんは何所どこへ行つたんです。

第二の群集 何所へ行つたかわからない。

第四の群集 何所から来たんです。

第二の群集 それもわからない。風のように来て風のように吹いて行って仕舞つた。

第六の群集 全くね、あの人は頼母たのしい人でした、あの人の言葉はみんな真実まことだつた。あの人がいたら屹度きつとこんな騒動は起おこらなかつたと俺わしは思いますよ。

第二の群集 所が大違ひさ、荒海さんのために此ストライキが起つたんだと、わしは信じます。

第六の群集 それは什麼したわけだね。

第二の群集 左様じゃ無かろうか、あの人がいろ／＼な事をわし達に云つて、わし達に考えさせたら、それでわし達が黙っていられ無くなって、此ストライキが起つたのじゃあるまいか、早い話が、治療所長の吉岡を排斥するにしても今迄うす／＼わし達がわからなかつたわけでも無かつたが、それをはつきりと教えて呉れたのはあの人だ。社長が吉岡と非常な懇意なものだから、手腕の無い人間であるに係らずわし達の大切な命を預けさせて置く、其ために不具にならなくつて、怪我人も不具になる、生きる職工も死んで仕舞う。君達は命を奪われているのだと荒海さんが云つたじゃ無いか。

群集 ふむ。

第二の群集 購買組合の問題だつて左様だ、わし達が金を出して作つてある購買組合に、わし達から一人の役員も選挙されて無いとは大違ひの骨頂だ。

其ために天下り役員が不正な行為をすると云うは、つまり君たちに自分のことは自分ですると云う自治の精神が無いからだ、荒海さんが云つたじゃ無いか。

群集 ふむ。

第二の群集 賃銀三割増の要求だつて左様だ、戦争のお蔭でさ君達の収入は増したろう、けれども此物価騰貴で相変らずの貧乏じゃ無いか、それを見殺しにして会社は五割六割と云うどいらい配当をしたと云うは、君達に権利を主張する心が無いからだ、荒海さんは云つた。

群集の一人 左様だ左様だ、荒海さんは確かに左様云つた。

(第二の群集が何事をか語り続けようとした時、場の一角から拍手が起り、続いて満場に波及した。報告壇に山本が立上つたからである。山本の後に数人の委員立っている、群集 悉く鳴りを鎮めて山本を見る)

山本 御報告致します。交渉委員が唯今帰りまして其報告に依りますと、第八回の交渉も失敗に帰したとの事でござります。(群集呻く)会社を

代表しての竹内工務課長の御言葉は依然として、職工の行為は逆行行為である(群集再び呻く)会社にも相当の考えはあるが、職工が其非を改めて復職した後にあらずば言明する事が出来ぬ(欺されるなど叫びし者あり)もし復職した場合には折を見て賃銀も上げよう、其他の条件も納得出来るようにしてやろう、(其手は喰わぬぞと叫びし者あり)私を男と思つたら何事も云わずに私に任して呉れとの事でござりました。(狸に任せられるかと叫びし者あり、群集騒然危険性益々加わる)

山本 (群集が騒いでいるので大声で叫ぶ)諸君(暫く間を置いて静かに)然しながら我々は破壊的の行為に出てはなりません。同志の一人と雖も秩序を乱す行為があつてはなりません、もしか斯かる人があつたならば、其人は我々全部を毒する所為であります、堪えて下さい、堪えて下さい、日本の職工の為にです、真実の自由と幸福の為にです。(僅かの間)私はいよゝゝ残して置いた一つの方法を用いようと思ひます、其方法が果して成功するか什麼かは今晚で無くばかりませぬ。其方法はどうな事であるかと云う事は、明日おわかりにならうと思ひます。諸君、明朝の人時、今日の如く又此会場に御集合をお願い致したい、(委員等と私語せし後)それでは今日は之れで此集合を解散します。(群集拍手する)

山本 (急に忙しく呼び止む)諸君、諸君の中には米の全然無くなつた方もあらうと思ひます。左様云う方は什麼ぞ御遠慮なく、他の委員の方になり私になりお申し出を願ひたい、それでは諸君の家族の方々にもよろしく、(群集拍手の後帰り行く)(布川久太郎は作業衣を着た、険しい顔の持主である。立去らうとする山本を引き留む。やがて群集残らず立去る。舞台に残れる者布川と山本との両人のみ、夜はもう寺院の隅々に忍び込んで、何所やらの工場の汽笛が不安げに唸つた)

布川 (四辺に人無きを見定め、眼を据えて山本を見た後)残された一つの方法とはどんな事です。

山本 (微笑)

布川 (人を突殺す真似をする)で、しょうがね、いっや、隠して貰いますまい。だがね、其役目は俺の役目じゃござりますまい、お前さんには後に残って仕事をして貰わにやならない。其役目は俺の役目だ、俺は彼奴あいつに恨みがある。

山本 (すいっと布川に近寄って)布川君、お願いだからそんな事はして呉れるな、(間)それに私の残された方法とはそんな事では無い。

布川 隠しても駄目だ、それをしなくて外ほかにどんな事をするんだ。

山本 実はね、吉岡治療所長の為めに不具にされた人間を社長の面前に並べて見せるんだ。社長とても血も涙もある人間なら、其眼の前の不幸を見て心を動さないわけはあるまい。

布川 (噛みつくように)それじゃ、やつつけるんじや無いんだな。

山本 それは断じてしてはならぬ、何所迄も正義に、何所迄も人道を尊んで、

布川 (怒鳴る)何が人道だ(山本に対して反感を持ち)そんなお茶番をやって、それで社長がうんと云うと思うのか、フン笑かしやがらあ。勝手にしろ(立去ろうとする)

山本 (布川を引留む)全く手荒な事はして呉れるなよ。

(兩人激しく顔を睨み合う)

山本 私は確かにしてみせる。たとい悪魔の心でも動かしてみせる。

布川 もし悪魔がうんと云わなかったら什麼する。

山本 其時は

布川 (毒々しく笑う)他人の不具者共かたわものどもを其面前に並べたってよ悪魔の眼には蚊トンボの鳴く位にも思うめいよ、人間が一番こたえるのは、自分の身が痛い時だ(笑う)

舞台廻る。

第二場

(野澤造船所の職工社宅の入口駄菓子屋の前の道路に大勢の職工の家族が、職工等が寺院から帰って来るを待ち受けている。社宅のとりつきの家は山本の家であつて、舞台の上手に其入口だけが見える。背景は磯馴松そなれまつと遠くに海、海は今しも夕日の為め金色に輝いている。豆腐屋のラツパの音)(やがて職工等帰り来たる。家族等其成否そのせいひの問いを浴せかける。職工等多くは黙々として、其家族と共に退場)

職工の若い妻 (帰って来た夫の顔色を読んで) 矢張駄目なのねあなた、憎らしい、私達を干乾ひぼしにしようとしてさ。

若い職工 仕方が無いさ、金さえあれば人を活いすも殺すも勝手な世の中だからねえ、神戸へ行こう、ねえ茲ここばかりが工場じゃ無い。

職工の妻 ごらんなさいよ、(下手の舞台外を指して) 何て贅沢ぜいたくな新郎でしょう、まるで官殿のようじゃありませんか、今年の秋、あそこで社長の書生ッば

うが御婚礼するんだとさ、其時は火の雨でも降って宅ぐるみみんな焼いて仕舞ったがい、(罵る) 職工の脂汗あせで出来た金を掠奪りやくだつして、あんな宅を作つて、それで社長様も無いものだ。ねえあなた、兩人ふたりで結婚した時は宅は間借で米櫃こめびつ一ツ買うおあしさえ無かったじゃ無いの、

職工 今更いまさらそんな事云つたつて、身分が違ちがうんだもの、

職工の妻 (夫の顔を凝視して) 何はつて張合はりあの無い人でしょう、ロシヤにはね、赤い牡鷄おんどりが飛んだつて言葉があるわよ、あなた知つていて、

職工 帰ろうよ、お腹が空すつた。

職工の妻 お腹はらが空すいたつて、お飯いなんかありはしないわよ。赤い牡鷄おんどりが飛んだつて云うのはね、放火つけびの事よ、赤い牡鷄おんどりが飛んだつて、手たを叩たたいて喜よろこぶロシ

ヤ

の人民の気持が、あなたにはわからない。

職工 止して呉れ、そんな事を警察にでも聞かれて見ろ、時節柄、たゞではすまねえぞ、

職工の妻 什麼するっての、監獄へでもぶちこむっての、ぶちこみたいと思つたらぶちこんだらいっじゃ無いの、多勢の人間を干乾にしても黙っている警察
な

ら、罪の無い人間を監獄へぶちこむがい、

職工 帰ろうよ帰ろうよ、

職工の妻 何つてあなたは意気地無しでしょう、しっかりなさいよ、こんな時に荒海さんがいらつしゃると、どんなに助かるかわからないんだけど、

職工 (急に眼を輝す) 今日も寺で其話が出たよ、荒海さんは全く偉い職人だった。

職工の妻 あなたが荒海さんだったら 眞実にいっただけれど、あら何だつてそんな顔をするの、

職工 どんな顔もしはしないよ。

職工の妻 私が荒海さんに惚れているだけでも思っているんですか、全く惚れているわよ、惚れていて悪いなら什麼とかしたらいっじゃ無いの、私の髻をぎ
ゆ

つとつてさ、よくも己の面に泥を塗りやがたつて、私の顔の歪む程ぶん擲る程なら、眞実に嬉しいんだけど。(兩人話しながら退場)

(舞台空虚。薄闇がもう松の樹の根元に迷っている。海はもう見ええない、家々には電燈がついている。海上からも船の灯が見える)

(山本、跛の男其他二三人の職工と共に登場、自宅へ入る。片眼の男、片手の男、大火傷した男など別々に登場、山本の宅へ入る。もうすっかり

夜である日月がいつの間にもやうら出ている。松の梢を吹く風の音)

(山本の宅より、山本、跛の男、片眼の男、大火傷した男其他二名程の職工出て来る)

大火傷した男 (人々と共に歩み、下手より立去ろうとしたが、思い出したように山本の傍に行き、何事をか囁く)

山本 (立止まって何事か低声で答える)

(人々其の周囲に集まる。山本と大火傷した男とは何事か低声にて語り合う)

片手の男 (大火傷した男に向つて、突然罵るように) 今更そんな事云つたって仕方が無い。

大火傷した男 けれどね、唯、其何だ、そのなん気になるものだからね、

片手の男 それではもしも社長が俺等のやつつけた事をはねつけ、おまけに解備かいこすると云つたら君は什麼するってんだ

大火傷した男 さあそれが気になるから山本さんに其時には什麼して下さるって聞いているんでさあ。

片手の男 其時は、どうもこうもねえ、追い出されるだけの話さ、みんなの為めだあね。で、君はそれが不服だと云うのか。

大火傷した男 不服だつてわけでもないが、君とは違って、未だ此工場に籍のある身体だからね。

片手の男 今迄籍のあつただけ未だま幸福しあわせつてもものさ、こちとらは不具かたわになった、それツてんで直ぐ野良大か何かのように追い出されて仕舞つた。

大火傷した男 其代り金を貰つたじゃないか、今俺が追い出されると一文になるじゃ無し、こんな不具どこじゃ何所へ行つたつていゝ星に逢いつこは無し。

片手の男 フン、それで危い橋は渡りたくないとお出でなすつたな。

大火傷した男 君見たいな宿無しとは違わあ、

片手の男 宿なしだと、

山本 (静かに兩人を制し大火傷した男に) 君の考えも尤もだ、私は無理にすくめたくない、君の思った通りにしたがよい。ではね、君だけ此計画から

省はぶこつ、左様なら。

(山本人々を連れて立去ろうとする)

大火傷した男 (急に叫ぶ) 待って下さい(人々立止まる)俺も行きやしよう、どうせ乗りかけた船でさあ、

山本 (哀れむが如く大火傷した男を見る) 左様思った行きましょう。

片手の男 何のこった、そんなら初めから、文句を並べない方がいゝや、

大火傷した男 何だと野良犬、

片手の男 七面鳥。

(荒海文雄、野澤芳春と共に下手より登場、荒海は髭むしやな男、芳春は貴公子じみた男)(山本の一行ひたと口を嚙んだ、摩違に荒海等を透し見る)

職工の一人 荒海さんだ荒海さんだ(狂喜して)荒海さんが来たもう大丈夫だ。(山本等荒海を取り囲む)

山本 暫時でした、荒海さん。

荒海 やあ暫時(人々に向って)什麼だね相変らずかね。

職工の一人 飛んだ大騒動を起して仕舞いました。それでもわつちは貴君が此騒ぎを知ったら屹度助けに来て下さると信じていました。全く其通りだった、有難い、もう大丈夫だ。

荒海 僕は別に諸君を助けに来たわけじゃ無いがね。

職工の一人 (信ぜず) 御冗談でしょう。

荒海 自分の時いた種は自分で刈らなくっちゃいけないと何かの本に書いてあった(笑う)(芳春に向って)僕の友達です(人々に)諸君にも紹介しよう、此人は僕の矢張友人で野澤芳春君だ。

人々 (驚いて) 野澤芳春?

荒海 社長の息子だよ、まあそんなに敵意を持ちっこ無し、話して見給え、林檎を噛みしめるような味のする男だよ、(芳春に)ホイ之れは失礼。

山本 (進み出て) 荒海さん、何の為に此所にお出でになられた。

荒海 君に逢いに来たが、君達は何所かへ行こうと云うのだね。

山本 ごらんの通りです。

荒海 所が、僕は君達に君の宅迄引き返して貰いたいのだがね飛んだ御馳走をせまいものでも無い。

山本 (人々に) 荒海さんがあゝ被仰るが什麼しましょう。

職工の一人 引返しましょう。

山本 引返すに異存はありませんか、では引返しましょう、

(人々全部山本の宅へ入る)

(舞台空虚)

(布川の倅由三、下手よりぱたぱたと逃げ来って駄菓子屋へ夢中で飛び込む。其後を追いかけて来た男は、由三を引きずり出し、打ち擲って其手に持てる袋を取らんとした。由三は必死になって袋を放さない。駄菓子屋の親爺だの社宅の人達なぞが出て来て其有様を見る)

片眼の男 (由三を男から引離して) 番頭さん什麼したんだい全体。

番頭 見ておくんない、子供のくせに此野郎米をかつぱらいますね、

片眼の男 ふむ。(由三の持っている袋に眼をつけ) 其奴はよくねえ、由公、何だって又米なんてかつぱらうんだい。

由三 叔父さん、俺あの妹が泣くんだぜ、俺あだってひだるいや、

片眼の男 (優しく) 左様かい、番頭さん此子が悪いんじゃないよ、外のものじゃなし、子供が米をかつぱらうなぞ可哀相じゃ無いか、ねえ、すまないが

勘弁

してやって呉れ、

番頭 それはもうこんな場合だから勘弁するもしないもありませんが、盗まれた米さえ返して貰えばね、

片眼の男 それはすまねえな、なあ由公、叔父さんが勘弁して呉れるとよ、そんな袋を返して仕舞いな、

由三 之れを返すのかい。(もじくする)

片眼の男 左様ともさ、

由三 厭いやだい、

片眼の男 何だと、

由三 厭いやだい厭いやだい。(逃げ出そうとする)

片眼の男 (由三を捕え、向ッ腹をたて) わからねえな此野郎(由三を擲ろうとしたが、打ち兼ねて)米屋さんすまねえが、其米を俺あに売って呉れねえか、頼むぜ、

番頭 そ、それはお売り申してもよろしいようなものですが実は家で食べるお米ももう無いようなわけですからね、へえ、

片眼の男 成る程、それじゃ無理には頼まれねえ、由公あきらめて仕舞いな、

由三 厭いやだい、

芳春 (人垣の後より進み出て米屋に)どんなに高くもよい、僕に売って呉れんか、僕は野澤だ。

番頭 (芳春を見て)社長さんの若旦那、よろしうござりますとも(気が付いて、片眼の男其他を憚はばかって)へえ、実は宅うちで食べるお米もないようなわけではあります、

芳春 売って呉れるんだね、(代を払う、米屋頻りと頭を下げる)有難う。(由三に)其米袋はね君にやるから、早く宅へ持って帰りなさい、

片眼の男 由公うまくやったな、社長さんの若旦那だよ、よく礼を云いねえ、

由三 有難うよ、叔父さん。(嬉し相に駆け出す)

布川 (人垣から後に離れて、有様を見ていたが、走って来た伴せがれの由三を止める)

由三 あつ父ちゃんだ、

由三 (由三の持っていた米袋を取る。それを持ってつか／＼と芳春の前に立ち塞り、極端な憎厭の表情で、無言の儘米袋を芳春に投げつけ、芳春を威嚇し、のそりと立ち去る)

由三 父ちゃん、俺あの貰ったお米だぜ。(父親が一瞥も与えず立ち去って仕舞ったので、泣き喚きながら、其後を追う)

荒海 (芳春と顔を見合わせ)あの子供の父親だ。あの男の心は夜の七時を過ぎている。もう明るい太陽は見られない。

芳春 (感激して)思ったよりもひどい、有難うよ、荒海君、僕は君に依って此真実の職工生活を見せて貰った。

荒海 あの子供の将来を考えて呉れ給え、あゝ云う子供が無数に育ちつゝある労働者の家庭を考えて呉れ給え、それから蒔いた種を刈らねばならぬ
い時の事を考えて呉れ給え。

芳春 有難う。人間は自分の為しつゝある事を知らない、僕は父の前ではっきりと父の行為を責める事が出来る。

舞台廻る。

第三場

(野澤社長私宅の階上応接間。正面と上手に窓あり、草色のカーテンに飾る暖炉棚の上に荒れたる海の絵、寝椅子の上に商船の進永式の写真をかく中央に椅子に囲まれて円卓、其上に六月の花飾らる。壁の色は鉄色、華かな電燈台の如くに舞台を照す。扉は上手と下手との二ヶ所あり、書生上手の窓より頻りと外を見ている。遠くより多数の人間の叫び喚く声聞える)

下女 (登場書生に近寄りながら)わかつて、

書生 わからない海の方からのもあるし、左様かと思うと青葉ヶ岡の方からかもわからない。

下女 (書生と同じく窓から外を見て) ちっとも見え無いのね(人声聞える)あんなに遠くないわ。(突然驚いたように書生に槌る)

書生 何だい、何だってそんなに、いけないよ、

下女 (おどくして) だって、ほら、扉の外に何だか変な奴がいるよ、

書生 (僅かの間、ほっと息を吐いて) 何でも無い(安心したような、影弁慶のする笑様をする) 刑事だよ、あくしてすつかり守って呉れるから大丈夫だ。

下女 (ぴったりと書生に寄添いながら) 私はね、どうもあの辺が気になってならないの、誰かぞ忍んで来るような気がして、

書生 馬鹿云っちゃいけない。

(書生下女上手の入口より去る。其様子を伺っていたらしく、布川は青服の儘影のように下手の入口より忍び込み、様子を伺い、駆けて上手に入ったが忽ち逃げ来って、忙しく上手の扉の陰に身を隠した)

(野澤社長、吉岡治療所長、吉岡の娘千枝子、社長の妻おきよ、相つれて上手より登場、扉の陰に隠れた布川、風の如くに足音を盗みて上手へ逃げ込み外から扉を閉める)

おきよ (愕然として) あゝ誰かいましたよ、

社長 神経だよ、何が居るものか。

吉岡 (扉をあけて、外を見廻し) 誰もいませぬ奥様、

おきよ でも、扉が独で閉まるなぞって?

社長 お前さんは今日は朝っからそんな事ばかり云っているじゃ無いか。

吉岡 いや御無理ありません。何しろ、騒ぎが大事になって来ましたでな。(人声聞える) おゝあのように騒ぎ居る。

社長 弱い大が吠えるのじゃで、御心配はお無用じゃ、購買組合に口実を作らせて米の配給を止めてからもう四日目の明日あたりは奴等は働き出しますわ、(千枝子に向って) 什麼じゃね、千枝さん 吃驚なさったかね。

千枝子 (下うつむき、愛嬌笑をしながら) え、

社長 自宅の嫁御になられたら、未だ未だ吃驚なさる事が大層ありますぞ、が、職工達は決して憎い男じゃ無い。今はあのように暴れているがじゃ、秋になって、結婚式をあげた時、奴等に酒肴料しやくりょうを呉れたならば自宅の万歳を唱えて呉れる可愛い男達じゃ、其時はあの新邸から町を見下して、喜び騒ぐ職工等を見てやったがよい、(卓上のベルをおす) 千枝さんは未だ新邸の内部をごらんにならなかったかの、

書生 (登場) お呼びになりましたか、

社長 (窓を指す) カアテンを開けて呉れ、窓もじゃ。

(書生、正面の窓を開く、窓の外遠くの高台に壮麗な洋館が月下にすっきりと聳そびえている)

社長 (快げに洋館を見ながら) 什麼じゃ見事でごわしよう、あの新邸を見ると、わしの心かあそこに突立っているように思われる、(笑う) あ的心がすつかりと用意を調って、若い人達が結婚する日を待っていますじゃ、(笑う) 吉岡さん、あと三月ですな、

吉岡 然し社長、此騒ぎでは？

社長 (気にも止めず) 丁度二十六年目じゃ、九月の二十五日、其日をわしは忘れた事がない。其記念日にわしの倅せがれと、吉岡さん、あんたの娘御むすめごと結婚するのじゃ、わしは確かあの時にあんたに斯様こよう云った、此悲しい記念日を、喜びの記念日にしてごらんにいれる。とな、其念願が届いたと云うものじゃ、いろ／＼の用意はもう調ってある、家も衣類も、それから花、庭一面に珍らしい花の咲くように出来ている。

おきよ (不安げに) でもあなた。

社長 何じゃ、

おきよ 此騒ぎが何時終るかわかりませんのに、

社長 其事か、心配は無用じゃと云っている。

おきよ 又あんなに騒いで。(人声聞える)

(まり子、下女と共に登場、走って父親に縫すがる)

まり子 お父様怖いわ、

社長 (まり子を引寄せて) 什麼したのじゃ、

下女 御門前から怖い顔した人がお嬢様を睨にらむのでござります。

社長 ふむ、彼奴等あいつらが、なあに少しも怖い事はないよ、まり子。

まり子 お父様階下へ行きましょう、ねえお父様、

社長 階下したにも大勢おおぜいいるじゃないか、

まり子 だってよわたい淋しいわ、

社長 (笑う) まりちゃんはおいくつって姉ちゃんに笑われますよ、

千枝子 (まり子に近寄って) 私と行きましょう、ねえまり子さん。

吉岡 (まり子に) 叔父さんも連れて行って貰もらいましょうかな。

おきよ (社長に) 階下に行きましよう、何だか心配になります、それに此室はよくありません、いつぞやも無頼漢ぶらいかんが暴れた室でござりましよう。

社長 (笑う) まり子、お母様おいくつって聞いてごらん、みんな階下へ行つたがよい、わたしは独りひとりで茲こゝにいたい。

(此時まり子は千枝子と階下へゆきかけていたので父を振り返って笑いを見せたばかりで千枝子と共に行って仕舞う。続ついておきよも退場、書生はいつの間にかいない)

吉岡 社長(何か云わんとしたが、社長が寝椅子もたに凭もたれて何事か思い耽もたっているらしいので、言葉を止めて退場)(人々の騒ぐ声聞える)

社長 (永い間考え耽^{ふけ}っている。立ち上がって新邸を凝視す、再び以前の姿勢に返って過去を憶う) (芳春、下手の入口より登場、父の姿を見て、つか／＼と其傍に寄る)

社長 (心付いて) おう芳春、帰って来てか、わしは今婚礼の時を考えていました。

芳春 (呆れて) 婚礼？

社長 三月と云えばもう直^すぐじゃ、什麼じゃね、あの新邸の姿は、今もわしは自慢したばかりじゃがの、

芳春 それ所ではありますまい。此騒ぎを什麼なさいます。

社長 (事も無気に) 其事ならば心配無用、米の配給を止めたので、もう程なく職工は働き出す、

芳春 (叫ぶように) お父様、あなたは職工の要求を一ツも御聞き容^いれぬお考えですか、

(父は子の顔を凝視したが一言も云わず、暫時^{しばらく}無言で父子は顔を見合った)

芳春 お願いです、何卒職工の要求を真面目に聞いて下さい。私は職工の要求を尤もだと思えます。

社長 (静かに) あんたはわしの処置^{しよち}に反対じゃと、云われるのじゃね。

芳春 (断子として) 勿論です。

社長 (笑う) 事業をすると云う事は困難な事での、若い人達のわからぬ事もあるものじゃ、わしの仕事はまあわしに任して呉れ、

芳春 然し正義は正義です、事業をなさるにしても、正義の観念を無視するわけにはなりませんまい、

社長 其所があんたと私との考えの相違している点じゃ、わしはわしの所置をよい事じゃと信じ居る、

芳春 では、貴父は此物価騰貴^{とうき}で、職工が生活に困難するを見殺しになさる御所存^{ごしよぞん}ですか、

社長 いや、左様では決して無い、けれども、職工が会社に反抗為す時、それを屈服せしめると云う事は、向後の事業の為め頗^たる必要な事じゃ。

芳春 お父様、あなたは現在の産業制度に相当しない御意見を持っていらっしゃる、資本主と近代労働者の関係をば、昔の通り主従的であると思っ
ていらっしゃる。其為めに貴父の解決方法は不正になるのです。

社長 其所じやて、其所が学校の窓からではわからぬ所じや。経験がわしに教えたのじやが、現在の職工は、わしのような管理法を行わねば、よう働
きおらんじや、賃銀を高く支払うと云う事もよい事では無い。

芳春 (驚いて)それは又何故です。

社長 金を余計にやると職工等は、其金を悪く使うのじや、金の無くなる迄工場を休み、工場へ出ても、其悪遊びの結果頗る面白からぬ仕事をし居
る。

芳春 其責任は全体誰にあるのですか。

社長 責任じやと、

芳春 左様です、此の悪の心を植えた責任者は誰ですかと云うのです。たとえ又其職工の行為が、全然其人間の無智と短見と性格から来していると仮
定しましても、其為めに資本主が、当然支払う可き金を支払わずによいとの理由にはなりません。

社長 何じやと(やゝ険しく)それでは、わしは支払う可き金を支払わずにあると云うのだな。

芳春 お父様、私は自宅へ帰る前、停車場から直ぐ職工等の住居へ行つて、そのくらし其生計を調査して見ました。狭い汚い宅へ群居し、殆どが貧民生活を強い
られています。あゝ云う境遇に置かれて、其心理が変態にならぬならば寧ろ奇蹟です。唯左様した生活が当然なものであるような習慣で辛く
も彼等は甘んじて生活していたとしか私には思われぬ、私はお父様明かに云います。左様した多数の職工の生活を見殺しにして、あんな宮殿
のような新邸を建てたは明かに罪悪です。

社長 新邸じやと、あれはあんだの為めに建てたのじやが、

芳春 私には呪のちわれた家の必要はありません。

社長 (怒れるが如く芳春を見詰む)

芳春 (黙って父の顔を見ていたが、突如として) お父様お願いです、あの新郎を職工の物として下さい、職工の教場として下さい、職工の倶楽部として下さい、

社長 (無言)

芳春 それから此同盟罷工の要求を聞き容れて下さい、職工を飢えたる境遇から救って下さい、

社長 (無言)

芳春 (父が黙っているので、自分も口を噤み、父を注視したが、やがて投げるような語気で) それではお父様、私の希望はお聞き容れありませんか、(重々しく口を開く) あんたは企業家の苦心と云うものや、又企業家の力と云うものを考えて見た事があるか、此苦心や力でわしはわしの財産を得た。其財産をわしの意の儘ままに使用すると云う事は少しも不正じゃ無い、と、わしは考える。

芳春 然しお父様、人間が財産を作り得ると云う事は、其人間の苦心や力ばかりではありません、四囲の事情と労働者があつて初めて財産をつくり得るのじゃありませんまいか

社長 其四囲の事情や労働を巧妙に用いると云う所に又、企業家の苦心と力が必要なのじゃ、

芳春 労働者を巧妙に用いると云う事は、労働者を飢えしめると云う事ですか、

社長 何じやと(語勢激しく云い放つたが、直ぐと痛ましく笑つて) まあ許して呉れ(もの柔かに) お父様はの、あんた達の結婚を楽しみに活きているよなものじゃ、永い歳月がかつてやつと其日が来た、眼の前に其日が来た。芳春、わしは未だお前に話さなかつたが、今から二十六年前は見る影も無い貧乏人であつた。わしは生きている土地も無いような窮乏に絶えず襲われた。それは無情な社会を味方と見たからじゃ。丁度あんたの今の気持が左様じゃ、いや云う事があれば後で聞く、わしはのとうとう社会の本体が明かにわかつた日が来た。それは九月の二十五日じゃ、わしは其日に死のうとした。(其時を思い浮べた如く、やゝ黙つたが) 其時わしを助けたはあの吉岡さんじゃ、其時からわしは社会を敵として戦う所

に、自分の生活のあるを見出した。力のある小数を味方にして、力の無い多数を敵とする、其所に自分の幸福がある（上手に扉をノックする音聞える）わしの歩いて来た道は険しいものであった。これだけの勢力と金と事業とを得んが為めには人知れぬ苦心が山のようにあった。（ノックの音）誰じゃ（扉の外で女の訪れる声がある）お入りなさい、

千枝子 （入来る、芳春を見て 耻し相な表情で挨拶し、社長に向って低声で）父があつての参りましても、よろしいか、伺つて来いと云いましたので、

社長 参られても？（僅かの間）は、あ、あまり声高に話したので、お心配せられたと見える。何、何でも無い事じゃ、実は千枝さん、今結婚の時の話をしていますので。

千枝子 （返事に困っている）

社長 お父様にいらつしやうって下さいって、芳春もいますでいろ／＼御相談も致ししょうから、とね

千枝子 はい。（去らんとする）

芳春 待つて下さい千枝さん、私達は今結婚の話をしていたのでは無い。

社長 （叱るが如く）芳春（言葉を転じようとして）芳春、あんたの頬にそれは血では無いか、

千枝子 （驚いて芳春の顔を見る）まあ、如何遊ばしました。

芳春 （頬に手を当てながら落着いて）茲に来る前、ある所で職工に打たれたのです。

社長 職工にじやと、

芳春 何こんな疵は何でも無い、職工等の胸に受けている疵に較べれば何でも無い。

千枝子 （手巾で芳春の疵を抑えながら）痛みませぬか。

芳春 （突然千枝子の手をとる）千枝さんあなたは自由と云う事をお存じでしたね、

千枝子 はい、

芳春 私共は自由を尊ぶ人間だ、だから他人の自由も尊ばねばならぬ。

千枝子 (怪しむ如く芳春を見る)

芳春 世界は今自由を叫んでいる、然し自由は叫ぶが故に尊いのではない、行うが故に尊いのだ、野澤造船所の職工千三百人は今自由を叫び、そしてそれを得ようとしている。真実の人道と自由とを思う者は之れに同情せねばならぬ。千枝さん、あなたは職工等がどんな事を会社に要求したか知っていますか。

千枝子 いっえ

芳春 お存じて無い？ (僅かの間)お存じて無くは私がお話いたしましたよう、まあおかけなさい。(芳春、千枝子椅子に腰かく)
(遠くに人声、叫び)

社長 (黙々として芳春の言葉を聞いていたが)もうよいでは無いか芳春、千枝子さんはそんな事を聞きたくはないのじゃ、

芳春 (父へは答えず)職工等が会社に要求したは三ツの事です、第一は、

社長 (語気荒く)芳春、

芳春 第一には賃金三割増、第二には購買組合の改善、第三には、

社長 もう止せと云うに、

芳春 第三には吉岡治療所長排斥です、

千枝子 (驚いて)いッッ。

芳春 あなたのお父様は手腕の無い医者で生きる負傷者も死ぬるような有様だから、それに自分達の身体を任せるわけにはならぬと云うのです。

千枝子 それは真実でしょうか、

芳春 そんな事もあなたには聞かせなかつたのだな（僅かの間）私は職工の要求を尤もだと思ひます、私は此所へ歸つて来る前職工の住んでいる家や、集っている場所へ行つて、よく其真相を調査して来ました。

千枝子 其時に其疵をお受けになつたのですね。

芳春 左様です、職工達は私を自昼強盗の作だと云いました。それから新邸を呪の家だと罵りました、

千枝子 呪の家――

芳春 私は職工達がそんな心になつたを無理ならぬ事と思う。職工達のストライキは経済的の運動であるばかりで無い、実に自由を取返す運動です、雇傭契約が一方だけの意志で定められたり、自分等の組合の役員を自分達で選挙出来なかつたり、自分達の身体を託すに、不安心な医者をあてがわれたり、

千枝子 それは父の事でございますか、

芳春 明かに左様です、

社長 芳春。

芳春 お父様、私は職工の宅へ行つて、手の無い人間に逢いました、跛の人間にも逢いました、片眼の男にも逢いました、彼等はそれを吉岡医者 of 責任、だと云つています、

社長 ばかな、何所の国に医者か怪我させる奴があるか、

芳春 （父の顔を見詰めて一言も云わずやがて千枝子に）千枝子さん、私の父はね、此職工が自由を得たいと云う運動に対して何をしたいと思います、工場の閉鎖を行ったのです、それから米の配給を止めて仕舞つたのです、左様して左様したならば職工達が働くであろうと云うのです、（泣くが如く）左様して官殿のような新邸を作つて、其所で私等に結婚せよと云うのです（唸るが如く）誰が、呪われた家で結婚出来るものか、

千枝子 （驚いて）結婚を？

芳春 千枝さん、私はね、私の自由の為め此宅を出て行きます。

社長 何じゃと、

芳春 お父様！

千枝子 (思わず芳春に縋る)それは真実、それはあの真実でしようか。

芳春 (千枝子の肩に手を置き、其顔を見詰めて)私は左様しなくばならぬと思います、(父に向い決然と)お父様、最後のお返事を伺いましょう、あなたは私の希望をお聞き容れありませんか、

社長 (剛腹に)出て行けッ

(下手の扉を押し開け、先程より様子を伺っていたらしく、山本を先頭に片手の男、片眼の男、跛の男、大火傷した男等入り来る)

社長 (大喝する)誰じゃ、何者じゃ、

(吉岡、上手の扉を開いて来りしが、忽ち千枝子と共に退場)

山本 (静かに)造機部の山本組長です、あなたは進水式の時、私をお見知りの筈はずでございます。

社長 其山本組長が何の為めに来た。

山本 あなたの御同情に縋すがらん為めです、此所に並んだ人達は、(負傷者等を指して何事か語らんとす)

社長 何故無断で侵入したかと聞いているのじゃ。

芳春 私が案内したのです。お父様、此人達をお父様は顔もお存知ではありませんが、他の工場の人ではありません。野澤造船所で働いて、そして怪我をして、不適當な医者かたわものの為めに不具者かたわものになった人達です。

社長 (山本に)それで、君達はわしを成嚇にやって来たのか。

山本 社長、私達は私達の斯かかる態度をよい事とは思いません、然し斯くするより外に方法は無くなったのです。

社長

会社の考えは竹内工務部長の日より君達に達している筈だ。わしは君達に対して何等の云う可き事は無い。たとえ又個人として君達に同情を有しているとしても、会社として定めた方針を変えるわけにはならぬ。

山本

私は人間として、あなたの理解と同情とを仰ぎたい。茲に来た人達は肉体を売った人達です。労働者は賃銀を得んが為めに労働を売っているのみでは無く、実に其肉体も売っているのです、労働をしたが為めに負傷為し、又は病氣にかつたならば、之れ明かに賃銀を得んが為め労働を売るのみで無く、肉体をも売るものであります。未だあります、それは大切な魂を労働者が売っていると云う事です。労働者は其労働者なるが故を以て、社会から冷遇され、働いても働いても生活を保証されるだけの金も、可愛い子供を教育するだけの金も得られないとしたならば、其心の尖^{とが}って、いら／＼とするは当然です。労働者には反抗的な気分感情のあるを私共も認識します、然し其気分感情は何所から来たかと云う事に就いて、お考えを願いたい、労働者以外の者には現われない、尖った心を労働者のみが持っているとしたならば、之れ明かに賃銀を得んが為めに労働するのみでなく、其魂をも売っているものであります。社長、私達は労働のみを売りたいのです、肉体や生命や、魂やを売りたいは無いのです。今迄の労働者は其事を知らなかったのです。知らなくして唯^{ただ}不平不満で盲動していたのです、其盲動が、工場にあつては外国とは比較にならない程の能率の低減を来し、社会の人間としては酒色に走り、或は浮浪の徒と化したのです。私共は国家の為めにも会社の為めにも個人の為めにも能率の増進を計りたい、酒色に走り浮浪の徒にはなりたくない、然しながら、其変態生活を強^しいられる所の基をなしている、工場の待遇其他を改善して戴^{いた}きたいのであります、私達は労働のみを売りたいのです、肉体や生命や魂やを売りたいは無いのです、之れ乃^{すなわ}ち労働者の自治自立の精神です。

社長

(不思議な言葉を聞けるが如く)労働者の自治自立じゃと、

山本

此精神が今度の同盟罷工を誘ったのであります。私等は決して不平等な要求を為し徒らに会社を苦しめんとするものではありません、私等は人間の生活をしたいのです、人間を取返したいのです。

社長 (頷く) わかった。君の言葉は忘れずに考えて置く、でな、明日からでも就業するように、仲間の人達に云い伝えてくれんか、会社でも職工が働こうと云う意志がわかればいつでも喜んで働いて貰おうでの、

山本 それでは同盟罷工の要求を聞き届けて下さるのですか、

社長 其事はわしがしかと考えて置く、

山本 と被仰ると、今直ちに御実行下さるのではないのですか、
おっしゃ

社長 会社の立場も考えてくれえ、職工にストライキをやられて、それを聞き届けたじゃ、世間に顔出しが出来ぬじゃないか。(笑って見せる)

山本 すると、あなたは什麼なさろうと云うのですか、

社長 時機を見て、君達の希望の達せられるように必ず取計ろうと誓うじゃ無いか。

山本 それでは竹内工務部長のお話と少しも違はないと思いますが、

社長 社長のわしが誓っているのじゃ。

山本 (やゝ激して) 社長、職工の心は剣やいばの刃のようになっていきます、仮に私があなたのお言葉を信じて、罷工者に伝言するとしても、夫それを彼等の剣の刃が易々と受け入れますか。飛んでも無い事変が起らないとも限りません。

社長 (笑う) わしの身の上に危難でも降りかかるとでも云うのかな、やって見たがよい。威嚇や迫害の前には、何事も聞き容れ得るものか什麼か、やって見たがよからう。

山本 (言葉無く、社長を睨んで唸る)

(不具者達の緊張した表情)

芳春 (父の前に進み出で) お父様、あなたは職工の要求を不当と思召おぼしめしていらっしゃるのですか、

社長 職工の行為は反逆的じゃ。

芳春 夫れは方法の事でしょう、職工の目的はあなたと雖も恐らくは認識されるであろうと思ひます、それは、あなたの今迄に被仰ったお言葉が、嘘でなくばそれを裏書しています。然るに、会社の対面と云つたような事で、職工の要求をお聞き容れにならないのです。会社にとっては問題かはわかりませんが、職工にとっては肉体と生命と魂との問題です。

社長 黙らんか、芳春、職工には職工の理屈はあろうが、会社には会社の立場がある。もし職工に誠意があつたならば何故、ストライキの如き非常手段に出でずに穏かに話をせぬか、

山本 それはもう、再三再四お願いした筈でござりましたが

社長 何じゃと、わしは聞きおらんわ、

芳春 途中で握りつぶしてあつたのです、中間者に依つて傭者と被傭者との意志の疎通を欠き、重大な問題をひき起した例がいくらもあります、

社長 ふむ。(軽く頷いたが、忽ち剛腹に) わしはそれを信ぜぬ、わしが信認している人達にそんな人間は無い。

片眼の男 (堪まり兼ねて怒鳴る) さあ、もう、か、か、堪忍ならねえ、止めるない、さあ斯様なつちや社長も糞もあるかい、

(舞台騒然、山本は負傷者達を止める。芳春は父の前に立つ、社長は平然と落着いている)

(吉岡医師、上手の出入口より飛込み来る。続いて千枝子、間も無く書生其他の二二人の男達来る)

吉岡 社長、私は責任を感じます、誰か適当な人材を治療所長に任じて戴きとうござわす、曲げてもお許しを願いたい、(山本等に対して) さあ、諸君の要求の一ツは解決した。此上私に此皺腹を切れとあらば、腹も切ろう。が、他の条件は一時見合しては下さらぬか、社長の位地になつて考えて貰いとうござわす。

社長 お待ちなさい吉岡さん。(立上る。山本等に対し静かに力強い声で) よシツ君達の要求を聞き容れよう、賃銀三割増、購買組合の改善、治療所長排斥、全部聞き届けた。(書生に向い) 田中、竹内さんは未だ会社にいる筈だ、電話でね、左様云つて呉れ、職工等の要求は社長が承知した、それから竹内さんに直ぐ此所に来るようにとな。

(書生去る)

芳春 (喜んで)お父様、それではお聞き容れになるのみですね。

社長 (山本等に対して)わしは日本の職工の意気地の無いのに愛想が尽きていた、殆ど奴隷根性を持っていて、自主自立の精神が無い、魂の無い人間じゃと思っていたが、(笑いながら)今聞けば、其魂を売っているんだ相な、で、其魂を売らないようにと同盟罷工をしたとお言葉じゃたが、それだけの自覚のある人間は極く少数であろう、大多数は矢張、奴隷のように使わねば働かない人達であろうと思うが、よかろう、危険な株でも買うつもりで君達の要求を聞こう、それで、職工等がどれだけ人間らしくなるか、工場の能率がどれだけ高まるか、面白い見物じゃと思う。

山本 社長、誓って工場の能率は高めます。労働者が不平なく就業する時には、生産能率は現在の倍になるを私は信じます。

社長 (笑う)三割値上して、能率が倍になれば大層な利得じゃ、時に君は山本君と云ったね、造機部の組長か、

山本 お言葉の通りです。

社長 痛快な男じゃ、それから其所にいる人達は、

片眼の男 (感働して)わっちは山本組長に使われている人間でへえ、先程は申訳ありません、全くその……………。

社長 其眼は什麼されたのかな、

(片眼の男何事をか云わんとせし時、俄然として電燈消える。舞台暗黒、間も無く少女の悲鳴が聞える。騒然たる人声物音)(やや永き間)(電燈つく、舞台には山本と不具者達、何事の起りしかを知らうとする表情にて、上手を伺っている。上手の入口より、布川風の如く馳せ来て下手の入口より馳せ去らんとす。山本其行手に立ち塞がる。社長、芳春、其他布川の後を追って登場)

芳春 (罵る)罪のない子供に危害を加えるとは卑怯者め、まり子に何の罪がある。

山本 (布川に)ひどい事をして呉れたなあ、社長は同盟罷工の要求を全部聞き届けたのだ。

布川 (せらゝ笑う)そんな事俺が知るかい、

芳春

(心は血縁の愛憐に頻りと襲われながら)神のような子供が何を知っている。子供を可愛いと云う心が君には無いか。

布川

(芳春を激しく睨みつけた後、心の底から湧き出て来る憎厭に満ちた、毒々しい声で)それが初めてわかったのか、俺等の餓鬼はいつでも殺され
そこなつていらあ、

(社長、芳春が昂奮して何事か云わんとせしを止む)

(布川は芳春、社長、山本、其他を睥睨^{へいげい}せしが、隙を見出して、下手の出入口より駆け逃げる。山本等其後を追わんとする)

社長

待て(人々を止めて)あの男の自由にしてやれ、可哀相な男じゃ。

(人々沈黙、遠くに人声聞ゆ)

幕急に落つ。

〈一九一九年五月〉